

平成25年度スーパーバイザー事業報告書

研究テーマ「自分の考えを進んで表現し、共感し、高め合う子どもの育成」

～たのしさと充実感を味わえる生活科・総合的な学習の時間～

鳥取市立逢坂小学校

I はじめに

本校は全校児童48名、中山間地域に位置する小規模校である。自然豊かで、3世代で暮らす児童が多く、地域が学校に協力的である。児童の実態として、素直でよく働き、地域のことをよく知っていて愛着を持っている子どもが多い。その反面、大勢の中での自己表現や、異なる意見を練り合い、より良いものにしていくという経験の不足により、一部の児童の考えで話し合いが進んでしまう傾向がある。

そこで、上記の研究主題を設定し、自分の思いをしっかりと持ち、主体的に進めていくことが出来る学習であり、様々な場面での思考力や表現力を培うことができる学習として、生活科と総合的な学習の時間を中心に一昨年より研究を進めてきた。

本年度は、広島大学大学院教育学研究科の朝倉淳先生にスーパーバイザーとしてご指導いただき、更に研究を深めることができた。

II 研究のねらい

本校では、一昨年からの生活科・総合的な学習の時間の取り組みの結果、次の三つの課題が明らかになった。一つ目は課題設定の力が弱いために、単元全体を通した十分な見通しを持つことができず、探究が主体的なものになっていないことである。二つ目は集団全体の思考の高め方である。小グループ内では付箋などを用いKJ法等で活発に自分たちの考えをまとめていくことができるが、それを全体につなげていくことが難しかった。三点目は児童一人一人の伸びや成長につながる評価である。当初は、予め教師が定めた観点に添って評価することに重点をおいていたため、児童が何をどのようにしているのか、なぜしているのかといったことを見取る意識が弱かった。

そこで、本年度は、つけたい力・具体的な児童像の系統性を見直し、各学年でのつけたい力を意識して研究を進めていった。また、全学年で地域を見直し、地域の様々な「人・もの・こと」と関わることで、地域を愛する心を育てていきたい。さらに主体的な児童・たくましい児童を育て、これからのグローバルな時代を「生きる」力の獲得へとつなげていきたい。

本年度の研究の視点

- 視点1 主体的に探究し、気付きの質が高まる授業づくり
- 視点2 言語活動が充実する思考する場、表現方法の工夫
- 視点3 児童一人一人の児童の伸びや成長につながる評価の工夫

Ⅲ スーパーバイザーの役割

平成 25 年度スーパーバイザー 広島大学大学院教育学研究科 教授 朝倉淳先生
--

1 研修の日程について（来校は 2 日間）

	① 7 月 16 日（火）	② 10 月 28 日（月）
2 校時	第 2・3 学年授業公開	第 1・2・4・5 学年授業公開
3 校時前半	第 4・5・6 学年授業公開	第 4・5 学年指導助言
後半		第 1・2 学年指導助言
4 校時前半	第 2・3 学年指導助言	第 3 学年研究授業 「広がれ！伝われ！ くろぼこ大豆パワー」
後半	第 4・5・6 学年指導助言	
5 校時	第 1 学年研究授業 「わたしのつうがくろ」	第 6 学年研究授業 「みんなが安心して暮らせる社会にⅡ～ みんなのふるさと逢坂～」
放課後	研究会	研究会及びミニ講演

7 月 16 日（火）第 1 学年研究授業および研究会での指導助言

10 月 28 日（月）第 3 学年と第 6 学年研究授業及び研究会での指導助言

ミニ講演「学校教育の今日的意義と総合的な学習の時間の新展開」

全学年が短時間の授業公開を行い、その後、朝倉先生から個別に指導助言を頂いた。

成果の還元

- ① 2 回の研究授業会には、同じ気高中学校区の小中学校をはじめ、鳥取市教育研究会の生活科部会と総合的な学習部会の先生方にも声をかけ、共に研究を深めた。
- ② 気高中学校区の小中学校合同研修会で逢坂小学校が生活科と総合的な学習の時間の授業公開を行い、その後、研究協議を行った。特に、学力向上部会では、思考ツールや見通しが持てる教室掲示、気付きの質を高めること等についての取り組みを説明して、好評だった。
- ③ 東部教育局の校内研究会の案内に情報を提供し、広く参加を呼びかけた。

2 朝倉先生に指導・助言を頂いた事項

- ・ 研究の方向性
- ・ つけたい力と具体的な児童像
- ・ 校内研修指導助言
- ・ 少人数での生活科の在り方
- ・ 総合的な学習の時間の進め方
- ・ 生活科と総合的な学習の時間のつながり

3 心に響いた朝倉先生の「この一言」

◆ 第1学年の学級担任には

「逢坂小学校らしい、少人数であることを生かした生活科ができる」

少人数だからこそできる生活科がある。子どもたちと話し合っ、単元の計画を立てていくこともできる。逢坂らしさを大切にしよう。

◆ 第2学年の学級担任には

「あなたたちが気付いたことは、もっとすごいことなんだよ」

子どもたちが見つけたことや気付いた事はとってもすごいことだと伝えよう。価値づけをしてあげることになる。そうしたらもっともっと気付きの質も高まり、次に誰かに伝えたくなるよ。

◆ 第3学年の学級担任には

「子どもに、もっと任せてみたらいいのに」

教師からすべて提示するのではなく、もっと子どもに任せよう。丁寧すぎるもよくない。子どもたちで取材をして、情報を集めてみよう。

◆ 第4学年の学級担任には

「いろいろなアイデアや考えを認めてもっと褒めてあげましょう」

「どちらのアイデアを出そうかなと悩まずに、二つも考えたんだね、すごいね。」とまずは認めよう。

◆ 第5学年の学級担任には

「たんじゅん たのしい ためになる」

難しすぎるとやる気をなくす。たのしいと自主的に動く。ためになったなあと思うことは、学びが深まったことだよ。教師も楽しもう。

◆ 第6学年の学級担任には

「ベン図の真ん中にあるのが 配食サービス」

3つの○の「もの・ひと・こと」の真ん中にあるのが、配食サービス。ツール(ベン図)は適切に使わないと、逆に子どもの思いと離れたものになる。

IV 研究内容

1 生活科の取り組み

(1) 視点① 主体的に探究し、気づきの質が高まる授業づくり

○価値ある体験を取り入れた単元づくり

第1学年「マイ畑へ行こう」の学習展開 生活科の内容(7)

少人数を
生かして



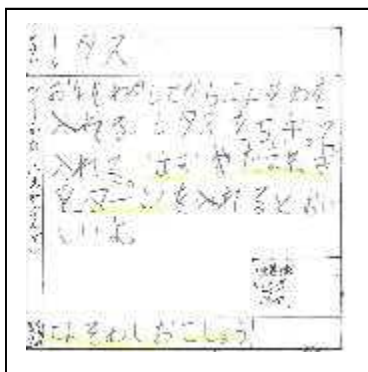
逢坂小らしい
生活科

逢坂には、クロボクという大山の火山灰が含まれた肥沃な黒土があり、そこで採れる野菜がおいしいと評判である。そこで、先ほどの指導から、少人数であることや逢坂らしさを生かして、自分たちの畑でなく自分だけのマイ畑を作り、育てたいものを自分で調べたり、種や苗を用意したりして、野菜を作ることにした。この取り組みは、1・2年生10人で行い、「大根・キャベツ・春菊・レタス・こまつな・チンゲンサイ・いちご・らっきょう」の8種類の野菜の栽培に取り組んだ。当然、畝も自分一人で作るし、どのように種をまくのか調べるのも自分である。

この活動を通して、子どもたちの取り組みはどんどん主体的なものになっていった。毎朝、畑に出て世話をする姿や家から本を持ってきて一生懸命に調べる姿も見られた。校長先生に看板も作って頂き、畑に名前も付けた。

らっきょうは2年生の女の子が挑戦している。地域探検で仲良くなったらっきょうのお店の方にどうしてもらっきょうを育ててみたいと直接交渉をし、育て方を教えていただき、苗を分けてもらってきた。

また、収穫した野菜をどのようにして食べるのか、おうちの方へ簡単レシピをインタビューし、3回に分けお試し調理を行った。ここでも、自分の育てた野菜が一番おいしいと自信を持ち、進んで準備や調理をしたり、職員室におすそ分けに行ったりする子どもたちの姿があった。家でもう一度作ってみたいという子どももあった。



<おうちの方へインタビューした自慢のレシピ>



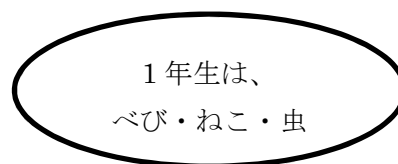
私のレタス、おいしいよ。スープにしたよ。

○気付きの質を高めることを意識した授業づくり

第1学年「わたしのつうがくろ」の学習展開 生活科の内容(1)

逢坂小学校の通学路を探検して気付いたことをもとに、話し合いをしたときのことである。(詳しくは、視点②で述べる)





実際の授業では、通学路探検で見つけた縁石やストップマークから問いを始めた。しかし、朝倉先生からは、1年生が探検で目がいくものは、まずは「へび・ねこ・虫」。だから、「もう一度へびやねこや虫に会いに行こう。どんなことに気を付けて会いに行けばいいかな?」と問いかけることで、子どもたちの中に安全という気付きの視点が生まれると指摘を受けた。

また、気付きについては、

- ・「目、口、耳、鼻、手、体全等」の諸感覚を使うこと
- ・実際に見える「もの（例えばストップマーク）や人」だけでなく、「だれが作ったのか」「なぜ作ったのか」といった目には見えない「意味や願い、思い」を考えていくこと

を大切にしていくと気付きが深まっていくとの指導を受けた。

(2) **視点② 言語活動が充実する思考する場、表現する場の工夫**

○比べてみよう・役割演技をしよう

第1学年「わたしのつうがくろ」の学習展開 生活科の内容(1)

逢坂小学校の通学路は小学校を境に、旧道沿いに面した上地区と県道沿いに面した下地区では、通学路の様子はかなり違う。そこで、上下地区を比較することで、通学路にある「人・もの・こと」や通学路に潜む危険を捉えやすくなり、自分の身の守り方等をより深く考えることが出来るようになると考え実践した。

上地区		下地区
狭くて車も少ない。スピードはゆっくり。標識少ない。縁石と歩道なし	道路の広さや車の様子	広くて車も多い。スピードが速い。標識多い。縁石と歩道あり
農作業中のおじいさんやおばあさん	出会った人	農作業中のおじいさんやおばあさん
道路の両側にたくさん家がある	家の数や様子	大きな道路ぞいにポツンと家がある
たくさんの花や虫がいる。とかげがいる。	虫や花、鳥など	たくさんの花や虫がいる。ミミズもいる。
鳥の鳴き声、水路の水の音、(流れが速い) 風の音、耕運機の音がする。花の甘い匂いがする。	耳 手 鼻	鳥の鳴き声、水路の水の音がする。鳥の羽ばたく音が聞こえる。水が冷たい。
家から道に出るところに多くある	ストップマーク	5個ぐらい

<上地域と下地域を比べる>



車が来たよ。どうしよう。

多様な表現方法の工夫ということで、ここでは、役割演技にも取り組んだ。ストップマークで立つ児童と、道路を走る車に分かれて演技をした。安全について考えたり、ストップマークでどのような態度をとったりしたらよいか演技を通して考え、演技を通して態度の定着を図った。

(3) 視点③ 一人一人の児童の伸びや成長につながる評価の工夫

○壁掲示を活用した評価の工夫

・第1学年 「マイ畑へ行こう」



少人数であることを利用した評価方法。横軸を4人の子ども、縦軸を気付きに見立てて、今、子どもたちがどのようなことに気付き、悩み、解決しようとしているのか、すぐに分かるようにした。

カードは、気付いた事は黄色、思ったことは赤色、やってみたいことは青色で表している。

<廊下の掲示。カードの数や色で気付き分かる>

○見取り表やポートフォリオ、振り返りカードを活用した評価の工夫

授業後に、その日に発言した内容やつぶやきを書き溜めていった。特に、1年生になりたてであまり字が書けない場合は、特に、子どもの発する言葉や表情を私がポートフォリオに書き記したり、教室掲示にしたりするように努め、気付きの質を高めていくことに活用した。

○できるようになったよシートを使った自己評価の工夫

・第1学年「できるようになったよ発表会を開こう」

ある先生の実践をもとに、自己評価カードとして挑戦してみた。単元の終わりに振り返り、現在自分について力を意識させた。赤シールは「自分の力でついた成長」、青シールは、仲間の力を借りてついた成長」として色分けし、どうやってこれらの力がついたのか、視覚的にも捉えやすくした。単元ごとにしっかり振り返り、自分について力を明らかにすることで、次単元でどのような力をつけたいのか、子どもたちなりに意識が持て、次単元への意欲につながった。



2 総合的な学習の取り組み

(1) 視点① 主体的に探究し、気づきの質が高まる授業づくり

○価値ある体験を取り入れた単元づくり

第3学年「広がれ！伝われ！大豆パワー」の学習展開

3年生は総合的な学習と出会う年である。朝倉先生の「たんじゅん たのしい ためになる」の三つの法則を用い、単元を構成した。そして、逢坂地区の土の特長である「クロボク」に学び、大豆を栽培して収穫した大豆を使った活動を展開していくことを考えた。

「大豆」は3年生に適した学習材であると考え。いくつか理由をあげると、

- ・3年生にとって大豆は失敗が少なく、作りやすい。
- ・収穫した大豆は、様々なものに加工することができ、興味が持続しやすい。
- ・多くの児童は実際に加工品を作ったことがないので、例えば加工品を作る際には作り方を学ぶなど、地域の方との関わりが欠かせない。

特に、本校が育てようとする資質・能力・態度のひとつである「かかわる」力をつけるためにも、地域の方との交流に重点をおいて単元を展開していった。

① 大豆を収穫するまでの活動

ア 種まき（6月）

4年生に昨年度の取り組みをインタビューする中で、大豆名人の平尾さんのことを聞いた。平尾さんは、大豆をまっすぐに等間隔でまくことができるような道具を持ってこられた。子ども達は、平尾さんに分からないことをたずねながら、収穫を楽しみに一生懸命活動していた。



イ 鳥よけ作り(7月)

日頃から家庭の大豆畑に関心を持っている児童から、「先生、家の畑に竹にぶら下げたCDがありました。」との発見から、学級で鳥よけ作りの話し合いを行った。話し合いでは、鳥よけのポイントを①鳥に見えること ②鳥がにげていくこと ③まわりの迷惑にならないこと ④自分たちが楽しくできること ⑤うまく作れそう



とし、CDと空き缶について5項目に照らし合わせて検討した。どちらもポイントが10ポイントになり、「作ってもいい!」と全員で判断した。3年生らしい鳥よけが完成し、大豆畑のオブジェのように見えた。

ウ 大豆の収穫、乾燥、取出し

児童は、自分たちで作成した大豆ごよみを見ながら、収穫の時期を平尾さんと相談した。10月の終わりに、平尾さんと連絡をとって、収穫をした。そして、学校近くの中川さんのビニールハウスの中に乾燥させていただいた。11月には、槌でたたいて取り出しを行った。ごみと分けるのが難しかったという児童の感想を聞いて、その場で唐箕の話もして下さった。



② 収穫後の活動の活動

ア きな粉作り

12月には、きな粉を作った。平尾さんは、おうちから製粉機を持ってきて下さった。たくさん量を手早く作りたかったので、子ども達は大助かりであった。きな粉が製粉機から出てくる瞬間に大歓声があがった。



イ 味噌作り

隣町の味噌屋さんが大豆の取り組みに興味を示されたことから、3年生は味噌づくりを学ぶことができた。プロである谷口さんは、味噌づくりのコツをたくさん教えて下さった。ゆでた大豆を樽に押し込む棒も、何十年と使っておられるものであった。使ってみると実に楽に押し込むことができ、みんなで感心し合った。大豆学習の広がりを実感した学習となった。



(2) **視点② 言語活動が充実する思考する場、表現する場の工夫**○**思考ツールを意識した言語活動の充実****第5学年「米米クラブ～くろぼっこ米を育てようプロジェクト～」****「米米クラブ～ぼくらの町の宝物プロジェクト～」の学習展開**

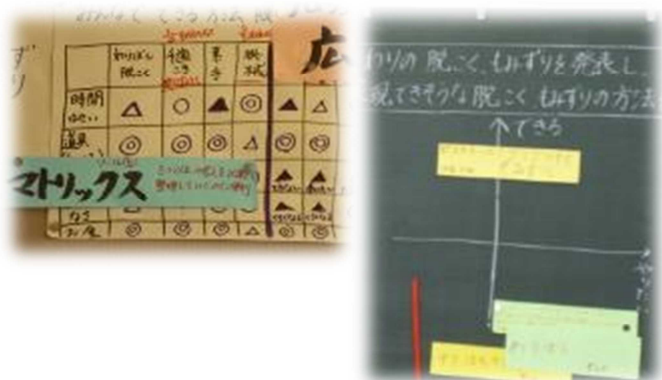
- ① 課題設定ではウェビング、KJ法をよく用いて、多様な考え方を引き出し、一人ひとりの思いや願いを言語化した。ウェビングはふれあい学習だけでなく、学活、国語で活用することも多かった。考えを広げる方法（思考ツール）を使って、作文の話題を広げる作業や、グループでの話し合いを活性化することに効果的であった。
- ② 情報収集では、情報カード、図、マップ、年表、カレンダーを用いて、集団の考えや情報を操作し、話し合いを進めた。

年表（カレンダー）を児童と共に作成。比較をすることでの気付きの質が深まり、次の活動が書かれていることで見通しをもって活動するのに便利なツールであった。また、児童自身も簡単に作ることができる。これも係活動や普段の生活の中で児童自身が使うようになった。

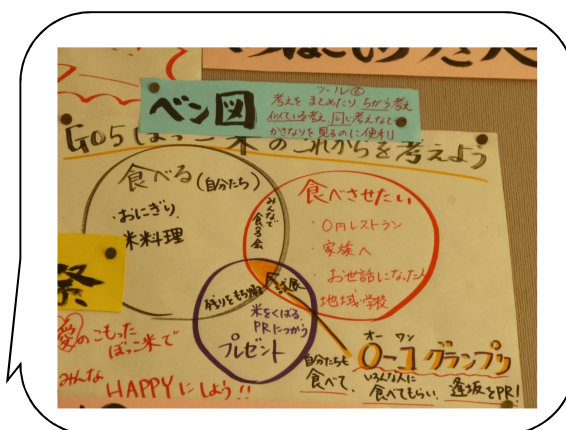


- ③ 整理・分析では、マトリックス、ベン図、ステップ図、ランキング、座標軸などを用いて「比較」「分類」「序列」「関連づけ」などの思考との関連を意識させ、根拠を明らかにして考え、表現する指導を行った。

まず、座標軸は付箋や短冊に書かれた考えを「比較」、「分類」、「序列」し、集団思考を整理する際に用いた。集団での話し合いで、「できる⇔できない」「やりたい⇔やりたくない」といった児童のやりたい気持ちだけでは難しい内容の時に、可能か不可能かという視点を入れる事で、具体的な根拠のもと、ランキングをつけることができる。また、話し合いの視点をはっきりすることで、支援の必要な児童も今、何を話し合っているのかが視覚的にわかりやすい。そして、短冊や付箋を動かしながら話し合いを進めることで、児童の考えを「発表し合う」から「考えを練り合う」に変わったように見える。



次にマトリックスについては複数の項目を「比較」する際に用いた。算数の学習で既に学習している図だが、話し合い活動で用いることで、発言力のある子に流れやすく、すぐに多数決で決めようとする傾向があった5年生たちが、考えたい項目も長所や短所をはっきりさせ、総合的に考えて意見をまとめることができるようになってきた。マトリックスは集団での話し合いだけでなく、児童相互評価の際にも用いた。ベン図は「分類」、「関連付け」の際に用いた。



(3) 視点3 一人一人の児童の伸びや成長につながる評価の工夫

○ 児童の見取りとその活用の仕方と、児童が学びや成長を感じる掲示の工夫 (第5学年の2つの米米クラブプロジェクトの実践から)

活動のまとめとして新聞を作るだけでなく、調べたことについて情報交換するために新聞を作成した。特に、米作りについては、それぞれ児童がテーマを決めて調べて集めた情報を、新聞にまとめることにより、米作りの中での分からない点について共通理解すると共に、どのような方法でどれだけの時間をかけて、どれだけの内容量の情報を収集することができたかを児童相互で評価することもできた。児童1人1人を見取る際の資料として有効なものであった。掲示することで、児童相互の刺激となり児童の調べる量も回数を重ねるごとに質的にも量的にも良くなってきた。ノートやワークシートに調べたことやわかったことをまとめる以外にも、新聞を作ることは、時間や児童の負担が多いものの、国語科や社会科で学習したことを生かすとともに、掲示することで学びを共有し、成長を確かめ合えるということ点で効果的であった。

○ ふれあいハンドブックを活用した評価 (第3学年の広がれ！伝われ！大豆パワーの実践から)

学校で作成した「ふれあい学習ハンドブック」には、情報収集の仕方や人との関わり方など書かれている。これを意識的に活用し、授業で扱うたびにシールを貼っていった。2回学習すれば2枚貼ってあることになる。シールがページに貼られていくのを嬉しがり、活動がますます意欲的になっていった。



○ 振り返りカードを活用した評価

(第3学年の広がれ！伝え！大豆パワーの実践から)

本年度は、評価カードとして右図のものを使用している。短時間で自己評価できる。

児童は、「すっきり」と「もやもや」の2つの視点で振り返り、また、つきたい力の「もとめる」「あらわす」「かかわる」のどの観点の力が身に付いたのかを自己評価する。

ただ、児童の気持ちがすっきりともやもやで表しきれないこともあり、まだまだ、改善は必要である。



V 生活科と総合的な学習のつながりについて

- 朝倉先生に今までおぼろげであった、2つのつながりについて明快に教えていただいた。

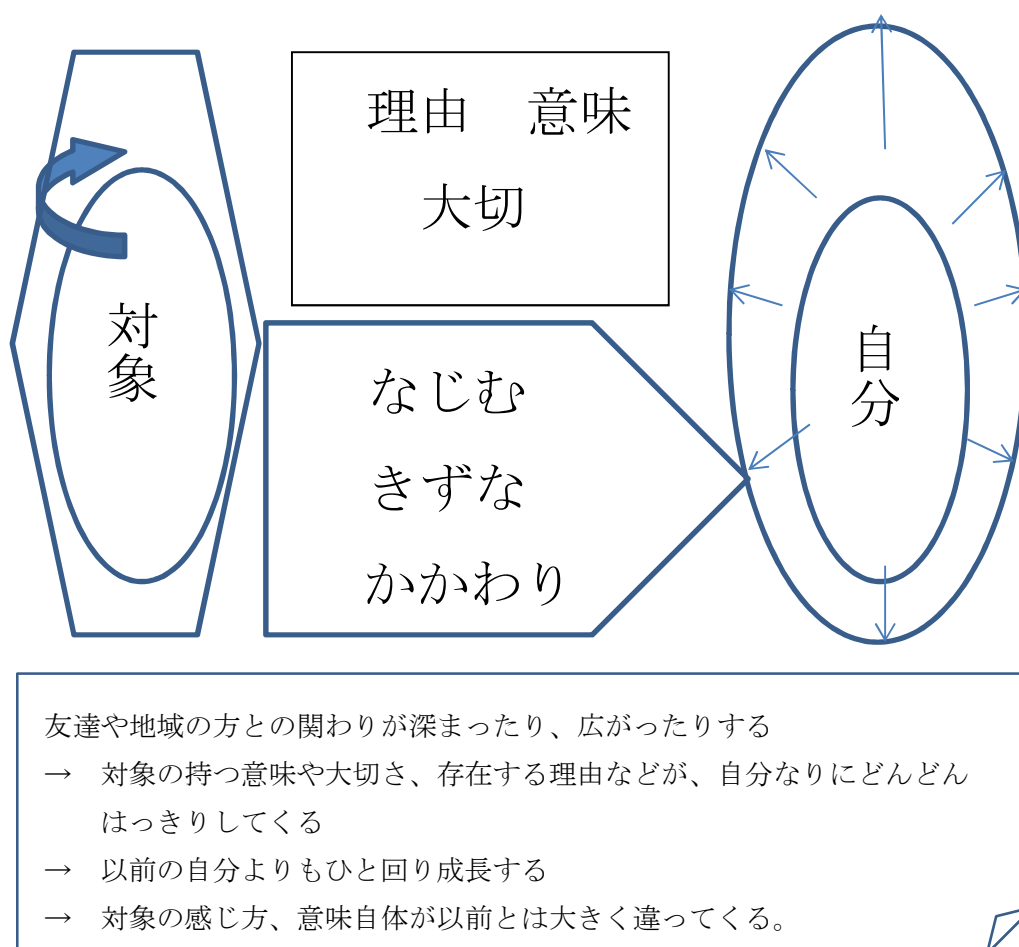
1 相違点

生活科	総合的な学習の時間
教科	教科外
目標	目標
内容が規定されている	内容が自由である
教科書がある	教科書がない
第1・2学年	第3～6学年

2 共通点

☆ 目的実現、問題解決型の学習である。
☆ 具体的な活動や体験を重視している。
☆ 協同的な学びを重視している。
☆ 対象と自分とのかかわりを強調している。
☆ 実生活・実社会との関係を大切にしている。
☆ 横断的・総合的な学習内容である。
☆ 実践的な思考力・判断力・表現力を身に付けることを求めている。
☆ 地域や家庭、外部との連携を重視している。

3 自己の成長と対象のとらえ方との関連



VI 研究のまとめ

1 成果

- 生活科が好き、総合的な学習の時間が好きな子どもが増えた。
 - ・「好き・どちらかといえば好き」な児童は、6月も11月も100%であった。
 - ・「好き」な児童に関しては、6月「好き」37%⇒11月「好き」53%へ増えた。
- 逢坂らしさにあふれ、少人数を生かした単元の開発が進んだ。
- スパイラルな探究へつながる価値ある体験の工夫について研究が深まった。
- 職員間の共通理解を図ることで、児童の学びの質が高まった。
 - ・気付きの質を高めるということについて（自覚された、共有された気付きへ）
 - ・つけたい力と具体的な児童像ができたことで、単元のゴールイメージやめざす児童像（最終ゴールは6年生の姿）のイメージがはっきりした。
- 適切な思考ツールの選び方や使い方（KJ法、ウェビングマップ、座標軸など）の理解が深まり、いろいろな場面でのツールの活用が増えた。児童にとっても思考が可視化され、自分の言いたいことがはっきりするなどの利点があった。

2 課題

- 児童の活動が活発になったり思考の深まりが見られたりするような見取り表の工夫や活用、自己評価や他己評価を取り入れた評価カードの工夫を行う。
- 身についた力とつかなかった力を明らかにし、次年度への研究へ反映させる。
- 思考ツールを活用し、グループの話し合いだけでなく学級全体の場での話し合い活動の充実を図る。目的に合ったツールの選び方とその活用の仕方について、理解を深め、活用できるようにする。
- 主体的な活動にするための教師のしかけを工夫する。
- 学習の見通しや足跡が分かり、児童の支援につながる掲示の工夫に努める。
 - ・活動の見通しが持ちやすい教室環境の整備
 - ・思考ツールシート、年計に対応させた図書や資料の整備を行い、学びのコーナーを設置する。

VII おわりに

今年度、朝倉先生をお迎えし、研究授業を始めミニ講演等の中で、生活科と総合的な学習の時間について様々なご示唆を頂き本校の研究を進めることができた。また、2ページの指導助言でご指導いただいた各担任の「心に響いた朝倉先生のこの一言」は、自分たちの置かれた現状について、ドン・ピシャリの助言であった。これからはますます精進しなければ、と思わされた「この一言」であった。

視点3の見取りと評価については本年度からの研究であり、各担任でさまざまに工夫をしてきたものの、まだまだ改良の余地がある分野である。ICT等の活用や自己評価や他己評価をうまく生かしたものが出来ないか、研究を進めていきたい。

6年生の最終ゴール「夢や希望の実現」向け、児童も職員も心を合わせて頑張っていきたい。